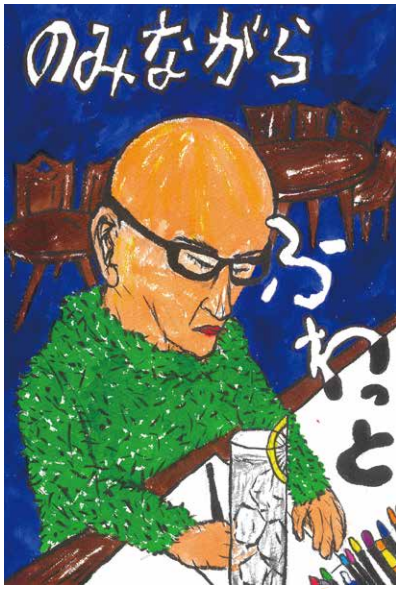
飛騨びと言の葉綴り

HIDA CITY 20TH ANNIVERSARY

市制20周年を記念し、飛騨市観光プロモーション大使で、作家のオカダミノルさんと「のみながらにがおえ」でお馴染みの波岡孝治さんコンビによる飛騨市民の言葉を綴る連載企画を隔月でお届けします。本編は市ホームページでご覧いただけます。

呑みながら似顔絵師～波岡孝治～「何事もフワッと！」



神岡町 波岡（なみおか） 孝治（こうじ）さん

「先輩恵子ちゃんのバーで呑んでても、店が忙しいと相手にしてくれんし、それからスケッチブック持参で似顔絵描いては酒呑んで」。
波岡孝治47歳。昼は家業の建築板金職人。週末夜が、呑みながら似顔絵師。
大学卒業後、茶葉飲料メーカーに就職。つくば市に赴任。だがサラリーマン生活に馴染めず闘病。「病院食が不味いから、よく売店へと通ったもの。そこで落書き帳を見つけて」。
その時感じた事を文字に託し、心象を絵にした。
やがて世紀越えミレニアム。「つくばでかぁ？って」。スケッチブック片手に、釈迦成道の地、インドのブッダガヤへ。インドでの体験は、波岡さんの人生観にも影響を与えた。
帰国後帰郷し、家業の職人に。数年後のGW。兄が赴任中のシンガポールへ。スケッチブック片手に、「シンガポール日記」と題し、文章と絵で綴った。「ぼくの眼のファインダーに映った景色を描くのが愉しくって！」
その後、旧友と再会。「子供に絵本書いてくれんか？」と。「文章や絵描くの昔から好きやったし」。この世にたった一つの絵本が完成した。
2015年頃。時事ネタを交え、フェイスブックに似顔絵を発表。すると「神岡ニュース」から連載のオファーが！「連載続けると、ぼくの絵と文章で、誰かの心を救うことが出来るかもって！」。同時に呑みながら似顔絵もスタート。７年で約350人。
「酒も気分で選んだり。心の中を吹き抜ける、フワッとした風のような感覚が何より大切」。
普段着のままの心で、神岡の似顔絵師は笑った。

宮川町 中谷（なかたに） 節子（せつこ）さん

宮川町種蔵～中谷節子～「茗荷（みょうが）作りは、数多（あまた）の縁（えにし）のなせる冥加（みょうが）なり」

「雪布団着て茗荷は、寒さに耐え春を待っとるんやさ」。「茗荷の師匠」こと、中谷節子さんだ。八十寿（やそじゅ）を迎え、今も茗荷作りに勤しむ。
節子さんは昭和19年、高山の農家で誕生。25歳で中谷家へ嫁いだ。
茗荷作りは、昭和45年の減反政策の影響に伴う。「町が茗荷を特産品にしようと、根を斡旋して。義母が茗荷作りを始め、私も勤めに行きながら手伝った」。当時８軒の茗荷農家も今は２軒。「今は各地に『My　みょうが畑オーナー』さんがおられ、草取りや間引き、茗荷の収穫と冬支度の藁敷を、手伝って下さっとる」。田植えが終わると、茗荷畑の草取り。次に親が茂り過ぎないよう間引き。やがて収穫。茗荷の根の越冬用に、親の茎を刈り畝に被せ上に藁を敷く。「茗荷は、雪が融けりゃあ藁布団も押しのけ、新芽が吹く。赤子と同じで生命力は凄い」。収穫するとゴミを取り選別。全体に赤く、色付きの良いものが特急品。
一方、後継者不足が課題。「茗荷だけでは食べれん。後継ぎも難しいもんや。でも春を待つ茗荷を思うと、『もう少し頑張れ！』と、そう言われとる気がするんや」。節子さんは玄関先で、白い茗荷畑を見詰め呟いた。「夫は48歳で還らぬ人に。それからは、義母の協力でがむしゃらに働き、家族と田畑を守りぬいた。でも今は、娘夫婦と孫２人に囲まれ一番幸せや。この暮らしが長続きすることが願いやし、皆の支援で農作業出来る事に感謝や。
もうちっとの辛抱や！雪解けの春は必ずやって来る」

UD FONT by MORISAWA
VEGETABLE OIL INK 再生紙と環境に優しい植物インキを使用しています。
●発行／令和６年４月15日　飛騨市役所　●編集受託／てのひらプロダクツ　●印刷受託／有限会社村坂印刷
〒509-4292　岐阜県飛騨市古川町本町2番22号　TEL 0577-73-2111　URL https://www.city.hida.gifu.jp/